



○ 多可町観光交流協会育成部会 部員

宮崎 和明
門脇 かおる
大井 精道
松本 寿朗
足立 壽
西田 公世
佐藤 俊樹
大塚 貫哲

○ 紙芝居制作助言者

埴岡 真弓 (播磨学研究所研究員 (コーディネーター))
藤井 英延 (多可町観光交流協会会長)
安平 勝利 (多可町教育委員会・那珂ふれあい館館長 (アドバイザー))

○ 参考文献

『山田錦物語』 兵庫酒米研究グループ編 2010年 神戸新聞総合出版センター発行
『北播ゆかりの人々』 脇坂俊夫 2016年 脇坂文庫発行

「山田錦」のルーツ
～山田勢三郎～

2020年3月発行

9場面

発行 多可町
〒679-1192
兵庫県多可郡多可町中区中村町123番地
電話 (0795)32-2380(代)

編集 多可町観光交流協会育成部会

イラスト 安倍 加織

印刷 ウニスガ印刷

①

「山田錦」のルーツ
やまだにしき
やまだせいざぶろうものがたり
山田勢三郎物語

子ども「このお米から、日本酒ができるんやなあ」

父親「ああ。日本酒の原料になる米を「酒米」と言っただけな。この

「山田錦」は、「酒米の王様」と言われてるんや」

子ども「へえ、すごい」

母親「山田錦のお母さんは、多可町で生まれたお米よ」

子ども「えっ、ほんと？」

山田錦は、昭和十一年、兵庫県の農事試験場で、「山田穂」と

いう稲を母親に、「短棹渡船」という稲を父親として生まれまし

た。

その「山田穂」の生みの親として知られるのが、山田勢三郎と

いう人です。



③

山田勢三郎は、江戸時代の終り頃に、東安田村、現在の中区東安田で生まれました。

山田家は広い田畑や多くの山を持ち、米蔵が現在の黒田庄町(西脇市)にあつたといわれています。

村人A「坊ちゃんが生まれたんやて。跡継ぎができてめでたいことや」

村人B「山田の安田か、安田の山田か」と言われる家やからなあ」
村人A「ああ、お屋敷も、三百坪あるいうで」

安田地区は、江戸時代、一橋家という、将軍・徳川家の一族だつた家の領地で、できたお米は「一橋米」として知られていたそうです。



勢三郎は、おだやかでまじめな少年に育っていきました。

そして、みんなといっしょに田や畑で働くことが、何より好きでした。

村人A 「勢三郎さんは、ほんによう働くなあ。感心なことちや」

村人B 「それによう稲のことを知つとる。毎日、田んぼを見てま

わつとるもんな」

安田地区は日当たりもよく、お米の栽培に適した土地でした。

できたお米は「安田米」と呼ばれ、評判でしたが、勢三郎はもつともつといいお米を作つて、村のみんなを喜ばせたいと思つていました。



稲いねにとって大切たいせつなのは、ゆたかな水みずがあることです。

勢三郎せいざぶろうは、田たんぼに水みずを引ひく用水路ようすいろを整ととのえることにも取とり組くみ

ました。

勢三郎せいざぶろう「ここから、水みずを引ひきましょう」

村人Aむらびと「なるほど。こっちへ水みずを流ながすんやな」

村人Bむらびと「これができたら、ここらの田たんぼも水みずに困こまらんようにな
るなあ」

勢三郎せいざぶろう「いっしょにがんばりましょう」



⑥

勢三郎が一番熱心に取り組んだのは、質のいいお米を作ることに、今でいう「品種改良」でした。

ある日、勢三郎は、田んぼの中で、ひときわ粒の大きい稲を見つけてきました。

かんでみると、とても甘みがあります。

勢三郎「これは、すごい。この稲を育ててみよう」

勢三郎は努力を重ね、この稲を増やすことに成功しました。



勢三郎は、この新しい種を、みんなに分け与えました。

そのおかげで、安田だけでなく、まわりの村々でも質のいいお米を作ることができるようになりました。

村人A 「ありがたいなあ。ほんまにいいお酒ができるなあ」

村人B 「山田の勢三郎さんのつくった米やから、『山田穂』や」

「山田穂」は、農業の教科書にものったそうです。

勢三郎は、出荷する米俵に「山田穂」の焼き印を押した印をつけさせました。



村人A 「勢三郎さんのおかげで、村はゆたかになった」

村人B 「そうや、そうや。村の恩人や。勢三郎さんのことを、い

つまでも忘れんようにせんとなあ」

明治三十七年、村人たちは、勢三郎の多くの功績をたたえる

「頌徳碑」を、勢三郎が生まれた東安田の地に立てました。

今は、石原坂トンネル公園に移設されています。



多可町では、平成五年から毎年、日本酒の日である十月一日に、歌手の加藤登紀子さんを招いて、「日本酒の日コンサート」を開催しています。

また、平成十八年には、「山田錦」生誕七十周年を記念して、「日本酒で乾杯の町」を自治体で初めて宣言しました。

勢三郎がつくり出した「山田穂」、そして、「山田穂」を母として生まれた「山田錦」は、今も多可町の人々に多くの恵みをもたらしているのです。

おしまい

